



TITLE:

ギリシア悲劇におけるカロス・タナトス(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

吉武, 純夫

CITATION:

吉武, 純夫. ギリシア悲劇におけるカロス・タナトス. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13056>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	吉武 純夫
論文題目	ギリシア悲劇におけるカロス・タナトス		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>古代ギリシアでは、死が、「美しい」を意味するカロスの語で修飾されることがあった。本論文は、カロスなる死とは何かという問題を精査したうえで、この概念がギリシア悲劇の中で用いられている実情を見渡し、この概念がいくつかの悲劇において問題を提起し、劇の展開に波紋を与えたり、劇のメッセージを導いたりしているさまを解き明かそうとしたものである。</p> <p>第2章 ホメーロスにおけるカロスの語を分析した結果、この語は官能的に捉えることのできる対象を修飾するときのみ、対象の卓越性を表すものであり、官能的に捉えられない対象を修飾するときは、対象の、何かとの適合性、あるいは問題のなさを表すものにすぎなかった。</p> <p>第3章 Tyrtaeusの詩では、戦死が明らかに視覚的に捉えられており、＜戦っている最中に倒れ死ぬという姿＞としてとらえられた戦死が、＜何らかの卓越性＞を表している。戦闘に文字通り命をかけたこと、その姿が称えられているのである。Tyrtaeusにおいては、それがカロスなる死なのであった。</p> <p>第4章 ヘーロドトスにおいては、＜つつがなく人生を終える＞、＜死んでもいい＞というような場合、死を表すのに、<i>θνήσκειν</i>（死ぬ）の語を避けて、<i>τελευτᾶν</i>（生を終える）の語を用いることにより、意味の区別がつくように配慮されていた。</p> <p>第5章 ソポクレス『アンティゴネー』はAntigoneが女ながらにカロス・タナトス（美しい死）を遂げることを目指すという話である。禁じられた兄の死体の埋葬を举行することにより、カロスに死ぬことを夢見る。埋葬行動をしながら死ぬことを自らイメージしてカロス・タナトスを申し立てたが、捕まった彼女は、予告されていた石打刑に処せられるのではなく、地下牢で飼いきれにされることになり、結局自ら首をくくる。この劇は、カロス・タナトスを遂げる機会は、女性にはほとんど閉ざされていたということにも、私たちに気づかせる。</p> <p>第6章 ソポクレス『アイアース』。狂気に駆けられた狼藉を働いて完全に面目を失ってしまったAiasが、熟慮のすえ自身の目指すべき行動としたのは<i>καλῶς τεθνηκέναι</i>ということであったが、それは意味のあいまいな言葉であった。それは必ずしも、広く訳されているような'nobly to die'ということではないと本論文は論じる。ソポクレスが彼に両義的な言葉を言わせているということである。それは＜立派に死ぬ＞ということと、＜死後、すべての問題を解消した状態でいる＞ということの二つを意味する。彼の自殺は、そのままでは、妻子の放棄と自身の死体の野晒しという、彼の名</p>			

譽にとっての重大な問題を引き起こしうる行為であった。**Odysseus** の援けによって葬礼許可がおり名誉も回復されたが、**Aias**は、武器を自由に手にすることができてもカロスに死ぬことができないという男の悲劇であると言える。

第7章 エウリーピデース『ヒケティデス（嘆願する女たち）』では、テーバイ攻めで死んだ将たちの戦死の光景（テアーマ）がカロスだと言われる。それは、愛する息子たちの姿だからという以上に、目に見える戦死者としてのありさまゆえのことである。カロン・テアーマとは、将たちの凄まじい戦いぶりを髣髴とさせる見事な絵をなし、見る者の心を揺さぶるような遺体の光景を表したものである。母たちも**Adrastos**も、それを見ることで激しい思いを掻き立てられた。カロン・テアーマはまた、彼らの死がカロス・タナトスであったことを証する光景でもある。カロス・タナトスの伝統の中では、その光景を人の目に晒すことが、彼らの死にざまを語ることと同様に、彼らの死を称えることを意味する。しかし、将たちの仕掛けた戦争は神の同意と義を欠いたものであったために、**Theseus**は彼らの死を称えることを拒む。彼が戦死者の遺体を家族の元に引き渡さず、早々と火葬してしまうのは、戦死の様を髣髴とさせるその光景が、その官能的刺激によって、同胞の愛惜感情を狂おしいまでに掻き立てて理性を奪ってしまうことや、またそのまま戦死者たちの行動全体を正当化する道具になってしまうことを警戒してのことである。この劇は、戦死遺体の生々しい光景に影響されて生じた、母たちと**Adrastos**の思いと、**Theseus**の理性主義との葛藤を描いた物語であると言える。

第8章 エウリーピデース『オレステース』では、カロスなる死というモチーフが2回語られ、劇の展開に重要な契機を与えている。オレステースが＜名誉のために潔く死ぬことをよしとしていた＞のをやめて、＜タダでは死なぬという魂胆＞の虜になってしまったという変わりようが見えてくる。彼のその変化の原因は、**Hermione**を人質として捕獲したことで死の埋合せがとれる、ということに気づいてしまったことにある。この劇は、埋合せ欲求に狂って分別を失うことへの実際的な警告を含んでいる。それはエウリーピデースが当時の市民たちに宛てたメッセージであつたろう。

第9章 アイスキュロス『オレスティア三部作』においては、死への心よせが多数語られている。**Aigisthos**が**Agamemnon**に対して復讐を遂げて満悦に浸りながら、もはや死ぬこともカロスであると言う。倒れ死ぬという語とカロスの組み合わせは、カロス・タナトスという概念を連想させ、彼が場違いにも、カロス・タナトスを遂げる資質を全く持ち合わせない人物であるのに、自分の死を立派な死だと申し立てているようにも響く。一方オレステースは悪い死を表すὀλέσθαι（滅びる）の語を用いていることから、彼は母殺しがいかに罰当たりなことかを心得ていて、悪しく死なねばならなくなことを覚悟している、しかしそれでも目的を果たすつもりである、という思いがそこに示されている。『オレスティア三部作』が描く主要対象は明らかに、女にやらせ

た復讐の成就に有頂天になっているAigisthosと、心を痛めながら復讐に命をかけて行動するOrestesである。Aigisthos が浅ましく口にしたカロス・タナトスの言葉は、三部作の主人公ともいえるOrestesの誠実な苦渋に光を与えるための重要な契機をなしているということができる。

三悲劇詩人それぞれにカロス・タナトスへの言及が背後の伝統を踏まえることでより深い意味を生み出している、とした結論に続き、A1～A2、B1～B3、CのAppendixが付される。A1は前8～5世紀にカロスを用いて死を表現した用例すべてを集め、A2はそれらを形態別に整理した。B1～B3はホメーロスの両英雄叙事詩におけるカロスとカッロスの全用例を集め、Cはエウリーピデース『ヒッポリュトス』の一節をめぐる補足議論である。

（論文審査の結果の要旨）

本論文はギリシア文学に見られるカロス・タナトスという表現の含意をその起こりからギリシア悲劇での用例までを対象にして精緻に検討した。「美しい死」と訳すことができるこの表現については、これまでそれ以上に深い意味が追求されることがなかったが、論者はカロス「美しい」がタナトス「死」と結びつくことでどのような豊かなイメージを生み出すかテキストに即して描き出して見せた。そこに本論文の大きな意義がある。

古代ギリシアで死後の世界は陰鬱きわまりないところと考えられた。それだけに英雄的な自己犠牲の物語はより強い意味をもって受け入れられる一方、死そのものは理想化して捉えられず、その結果、英雄を死後も不滅のものとする誉れが理想視されることになる。それを反映して、カロス・タナトスはまずもって戦場での死を讃える表現として用いられた。その一番手は前七世紀の軍事都市国家スパルタ出身の詩人テュルタイオスである。その断片10は、密集陣形を組んで最前列に立つ若い兵士らに自分の持ち場から退くなと励まし、一人の後退が陣形の総崩れを引き起こさないよう、命をかけて勇敢に戦うこと、そうして自分を犠牲にしながら全体に奉仕して命を落とすこと、そのような死、（弱々しい老兵の死が醜いのに対して）強く若い勇士の死をカロス・タナトスとして讃える。その賞讃は勇敢な若い重装歩兵を必要としたスパルタの国是にそうものだが、そこにはホメーロスの表現が組み入れられている。そこで論者はホメーロスにおけるカロス「美しい」、カッロス「美」の用例すべてを検討し、「官能的に卓越性が認められる」という場合か、（道具などが）「適合性がある」ないし「使って問題がない」という場合であることを観察した。それにもとづいて、テュルタイオスがカロス・タナトスを「官能的」な文脈に置くことで、若者らの死が卓越性を映し出したとする。ただ、ホメーロスにおけるカロスの意味分けはそれほど単純ではないとも思われる一方、論者が集めて整理した用例は興味深く有用である。

以上の議論に第Ⅰ部1章から3章が費やされたあと、4章は歴史家ヘーロドトスが「死ぬ」を表す二つの語彙を周到に使い分け、「美しい死」と「善ない人生の終わり」の描き分けに用いていることを示す。

第Ⅱ部（5～9章）はギリシア悲劇を対象とし、本論文の主要部分をなす。論者は悲劇にも「戦場での美しい死」が現れるが、それらは目立たず、カロス・タナトスないし、それに関連する表現は翻訳者を困惑させるような奇妙な文脈に見られると指摘し、そうした例を慎重に検討する。

ソポクレス『アンティゴネー』では、戦場での美しい死に与れない女性の身で、男性より強く、命をかけて自分を犠牲にしようとするヒロインが登場する。論者によれば、彼女の悲劇は、公の場で処刑されたなら「美しい死」が可能であったのに、牢獄内でただ一人首をくくって死ぬことにあったという（5章）。これと対照的に、

『アイアース』では、戦場であまたの武勲を立てた英雄が「美しい死」を得られない。そこには、戦場を離れてはいかなる英雄にも「美しい死」がかなわないものであることが描かれている、と論者は述べる（6章）。エウリーピデースの作品を取り上げた7章および8章では、とくに『ヒケティデス（嘆願する女たち）』において、戦死した息子らの遺体を母親たちが待ち受けるとき、それを「美しい見もの」と言う個所への検討が興味深い。姿変わり果てているはずの子らをそのように言うのは奇妙であり、解釈が難しいが、戦場でのカロス・タナトスを母親らが見守る火葬の場へ引き寄せることで表現効果を挙げていると論者は言う。9章はアイスキュロス『オレスティア三部作』を取り上げ、勇士と呼べない器の小さな登場人物がカロス・タナトスを口にすることに劇的効果が意図されていることが示される。

三悲劇詩人それぞれにカロス・タナトスへの言及が背後の伝統を踏まえることでより深い意味を生み出している、とした結論に続き、A1～A2、B1～B3、CのAppendixが付される。A1は前8～5世紀にカロスを用いて死を表現した用例すべてを集め、A2はそれらを形態別に整理した。B1～B3はホメロスの両英雄叙事詩におけるカロスとカッロスの全用例を集め、Cはエウリーピデース『ヒッポリュトス』の一節をめぐる補足議論である。ここにも論者の行き届いた目配りが示されている。

全般に、議論は適切なテキストを原語、日本語訳および欧米近代語訳を提示することを通じて問題への多様なアプローチがあることを示してから、博搜した二次文献の理解の上に、独自の解釈を提示する。「美しい」という多様な意味合いをもつ語彙、また、「美しい死」という曖昧な表現をめぐるのは、論者の解釈に疑義が出される部分もあることは当然でもあるが、従来の研究を整理し、新たな視点を提示し、適切な検討材料をフォローしやすい形で集積したことは大きな功績である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年8月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。